TRIGGER MAGAZINE

TRIGGER DISC REVIEW vol.1 - 9 (2018)

CONTENTS

03 vol.1
The Wisely Brothers『YAK』・Gateballers『「The all」=「Poem」』
羊文学『オレンジチョコレートハウスまでの道のり』・No Buses『Tic』

06 vol.2
SaToA『スリーショット』・Waater『Waater EP』・HYUKOH『23』
落日飛車 Sunset Rollercoaster『CASSA NOVA』・TENDOUJI『BUBBLE POPS』

09 vol.3
cero『POLY LIFE MULTI SOUL』・Hinds『I don't run』
Phum Viphurit『Manchild』・Nulbarich『Kiss You Back』

12 vol.4
渦『ゴーグル１』・おとぎ話『眺め』
betcover!!『平和の大使』・Snail Mail『LUSH』

15 vol.5
Rhyming Slang『FRESHALWAYSON X RHYMING SLANG / V.A.』・ベランダ『Anywhere You Like』
Years&Years『Palo Santo』・ニトロデイ『レモンド EP』

18 vol.6
羊文学『若者たちへ』

20 vol.7
The Vaccines『Combat Sports』・ArtTheaterGuild『Farafra』
Climb The Mind『チャンネル３』

24 vol.8
Shame『Songs of Praise』・Bird Bear Hare and Fish『Moon Boots』

26 vol.9
シャムキャッツ『Virgin Graffiti』・ニトロデイ『マシン・ザ・ヤング』・羊文学『1999』

28 Credit

29 編集後記

LISTEN ON SPOTIFY!

本誌で紹介している楽曲をプレイリストでチェック！

◎ PLAYLISTの聴き方 ◎

① Spotify のモバイルアプリにログイン
② Searchタブの 📷 マークをタップ
③ 上のコード画像を読み取る
④ プレイリスト画面へ！

The Wisely Brothers
『YAK』
2/21 release

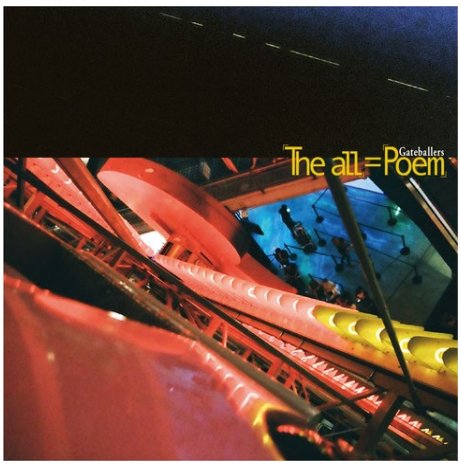
「TRIGGER FES 2018」ではトリを飾って頂きました、The Wisely Brothersのメジャーデビューアルバム「YAK」！
1曲目「グレン」からすでに今までのワイズリーとは少し違う、クールな雰囲気。
5曲目の「give me a mileage」も、段々と演奏に熱が篭っていく、ミステリアスな楽曲となっています。
そうかと思えば「キキララ」、「庭をでて」とワイズリーらしくキュートで愛らしい楽曲も。そう、このアルバムは彼女たちが持つかっこよさも愛らしさもぎゅっと凝縮した1枚になっているんです！

しかし、ただかっこいい・可愛らしいだけではないのがThe Wisely Brothers。

〈これから行くかなしみの / ひとつひとつは何か言いたげで / こわれそうな呪文も / やさしい口づけも / 足先の草原も愛していたい〉(「庭をでて」より)

この歌詞には彼女たちが持つ繊細さも、芯の通った強さも表れていると思います。
思わず走り出したくなるような疾走感のある曲調の中に、このような歌詞がさらっと入り込んでいるんです。そんなワイズリーの楽曲だからこそ、私たちリスナーは強く惹かれてしまうのでしょう。
まさにCDジャケットに描かれている果物たちのように、「YAK」には瑞々しい曲しか詰め込まれていません！旬なThe Wisely Brothersの音楽、ぜひ堪能してください

Gateballers
『「The all」=「Poem」』
2/21 release



前作から約2年振りとなるGateballersの2ndフルアルバム『「The all」=「Poem」』。
なんと「TRIGGER FES 2018」では、発売前にもかかわらず新譜から数曲演奏して頂いたんです。
サポートの内村イタルさんが入り、4人編成となったGateballersが奏でる新曲たちは音にも表現にも厚みが増しており、圧巻の幕開けを飾って頂きました。
そのようにして自分の中で期待値が高まる中、いよいよ『「The all」=「Poem」』を手に入れました。一聴したとき、まずサウンドの幅の広がりに驚きました。
持ち味のサイケデリック感・浮遊感はそのままに、楽曲のポップさがより炸裂したアルバムとなっています。そしてアルバムのタイトル通り、とにかく歌詞が素晴らしいです。

〈涙が乾くまで / 思い出してもいいよ / 一番きれいな夕日のことを / 生まれたばかりの赤ん坊の匂いを〉(「イメージ」より)

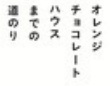
〈弾き出した言葉をいつも、後で拾う / 走り出した人生をいつも、歩いて帰る / 追いつかれまいとして僕らは皆恋に落ちる / ドアを開ければ時の流れに溺れるだけ〉(「Beautiful girl」より)

とにかく心をグッと掴んで離さない言葉たちだらけで、ふとしたときに頭の中でぐるぐる歌詞を反芻してしまうほどです。また、歌詞を見ていると人間の愛について歌ったもの、彼らの決意が表出した歌詞が多く見られるように感じます。一部抜粋しましたが、どこの歌詞を切り取っても美しいので是非歌詞カードを眺めながら曲を聴いてみてください！きっと心の琴線に触れる歌詞があるはず。

アルバムを通して、サウンド面でも歌詞でも、Gateballers の無敵感・最強感が溢れているように感じます。これからのシーンを作っていくであろうGateballersの金字塔的アルバム『「The all」=「Poem」』、聴き逃しのないように！必聴です！

羊文学
『オレンジチョコレートハウスまでの道のり』

2/7 release



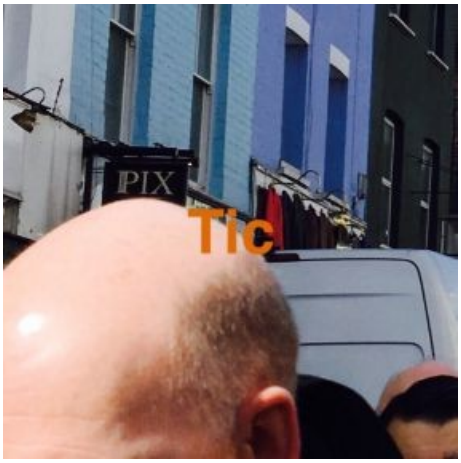
前作から4カ月を経てリリースされた今作。
楽曲には冬の澄み切った冷たさと、その先に少しずつ道が開けていくような、そんな暖かい感覚が。
聴いてみると歌詞での共感部分や、独特な音やリズムの違和感、浮遊感をまとったギターのリバーブの音にただただ心酔してしまいます。歌詞カードをなぞって心を震わせて聴いていたら夜が更けていたり。。夜更けに聴くのもとってもオススメです…！「涙の行方」の、耳がざわつく最初のコードの音からAメロに入っていく時のあのするっと落ちる感じがなんだかたまらないですよね。

また、「ブレーメン」の歌詞の中にある、子ども故、若さ故の不自由さや苦悩、そこに共存する希望のようなものだとか、感情ののせられた歌詞にすごく心揺さぶられたり。。
皆さんも浮遊感と轟音の中に広がる3人の世界にどっぷり身を委ねてみてはいかがでしょうか。きっとそれぞれの聴き方を見つけて、顔をあげたくなるはず 👀

音源を聴いた方はぜひライブへ。TRIGGERFES2018でも圧巻のライブを見せてくれた彼女たち。
ライブでしか見れない魅力があります、更に目が離せなくなること間違いなしです！

No Buses『Tic』

4/2 release



下北沢、渋谷を中心に活動している
男女4人組バンドNo Buses (ノーバシーズ) 。

「TRIGGER FES 2018」の会場で販売していたデモCDも当日持ち込んだ分は完売してしまっただとか…！3月(2018年)には初の自主企画を行うなど活動も増え、今後の活動も益々見逃せないアーティストです。さらっとした抜け目のないボーカルと音に寄り添うように刻まれていくリズムやギターのメロディラインには思わず吸い込まれそうになります。ブレない土台が出来上がっている彼らのバンドサウンドは魅力の一つ。とにかくもう、ぜひ一度ライブに足を運んでほしい。ライブでの演奏力には何度でも圧倒されるはずです。先日公開された『Tic』のMV。今まで謎めいていたビジュアルも明らかに…！

クールな新曲とシュールムービーの融合 ’’ダサくてカッコイイ’’ MVは必見です 👀
新作はライブ会場やオンラインで購入できるとのこと。是非お手にとってみて下さい。

SaToA
『スリーショット』
4/11 release (all over Japan)

スリーピースガールズバンドSaToAの1stミニアルバム「スリーショット」！
自主制作盤「SaToA」よりも曲の濃度はぎゅっと詰まりつつ、持ち前のポップなかっこよさは健在です！初めて1曲目の「青草の匂い」のイントロのカッティングが効いたギターを聴いた瞬間に、最高…と息が漏れました。夏のきらめきやわくわくを丸ごと凝縮したような爽やかなチューンで、夏に差し掛かろうとしている今の時期にぴったりな曲です！少しだけ暑いよく晴れた日にお散歩しながら聴きたい
3人の息ぴったりなボーカルもとても心地良く、耳にスッと馴染んでいきますね。トリプルボーカルがやはりSaToAならではのグルーヴ感を出しているなあと思います。

「bitter coffee」のキュートな歌詞に浸るもあり、「夢の島」のおとぎ話のような歌詞の世界観に微睡むもあり、「Wonky Bridge」の遊び心たっぷりなボーカルテイクに心躍らせるもあり！聴いたらすぐに彼女たちの虜になってしまうこと間違いなしです。今すぐライブに行ってみたくなっちゃいますよ～！
極上のインディポップを是非ご賞味あれ

秋田県出身の5人組インディー・ロックバンド。
セルフタイトルを背負った初のミニアルバム『Waater EP』。
シューゲイザー、USインディ、ドリーム・ポップなどなど…楽曲の構成から様々なサウンドの要素を感じる聴きごたえ抜群の7枚です◎EP2曲目の「Remember」は、まるで水しぶきが飛ぶように煌めくギターリフが特徴的で、ザラついたノイズはDIIVといったシューゲイザーバンドを彷彿とさせます。さらに、電子音を用いることで生まれる独特な浮遊感にはDay WaveやTape WavesといったUSインディ、ドリーム・ポップのサウンド要素を感じられます。また、EP3曲目の「Who You Are」は、サーフ・ロックのような爽快感を味わうことができます。
この通り、素因数分解のように1曲ずつ素の音を分解したくなるくらい様々なジャンルが絶妙なバランスで組み合わさっているんです！全曲必曲です！

Waater 『Waater EP』
3/14 release

HYUKOH 『23』
4/24 release

2014年デビュー韓国4ピースバンド、HYUKOH（ヒョゴ）。アルバムのタイトルには制作時の年齢をつけていますが、最新作『23』ではパワーアップした4人の感性が感じられる作品となっています！
前作『22』と聴き比べるとサウンド面ではハード曲がよりクールに、バラード曲はよりメロウに進化しつつ、彼らの音楽スタイルである”ネガティブな感情”を描くリリックとのギャップにHYUKOHらしさを感じられます。
例えば、「가죽자켓 (Leather Jacket)」ではカントリーロックの踊りたくなるサウンドに”生きることへの疲弊と閉塞する心”を歌い、「TOMBOY」ではシンプルでゆったりとしたリズムとサウンドに”愛や幸せに対する不安”を歌っています。彼らの音楽に私たちはセンシティブな若者の感情のリアルさを感じられると共に、なぜだかそこに高揚感といった”ポジティブな感情”が引き起こされるでしょう。これぞHYUKOHマジック！ 同世代の人は特に聴いてほしい！！HYUKOHの”今”を象徴する『23』にどこかで体験した瞬間と重なる一曲がきっと見つかるはずです。現在はドイツで次のアルバムの制作中。
次作ではどんな姿を見せてくれるのか今から楽しみです！

落日飛車
『CASSA NOVA』
4/25 release

台湾出身5人組バンド、落日飛車(Sunset Rollercoaster)。
”落日飛車的アーバン・オリエンタル・ロック”と呼ばれるその音楽性が台湾を越えて日本などアジア圏で高く評価されています。
そんな彼らの最新作『CASSA NOVA』。何といってもオシャレで爽やかなサウンドの心地よさがたまりません。蒸し暑くなってくるこれからの季節にピッタリではないでしょうか…！
休日の朝や夕方に何も考えずのんびりしながら聴くのがオススメです。特に浜辺で聴いていただきたい

「Almost Mature’87」や「Oriental」のサイケデリックな音の世界から後半部にかけてドラマティックに盛り上がりをみせる音の変化や「slow」の冒頭におけるチューニングのずれたノスタルジックなピアノの音、「10-Year-Taipei(Maured’17)」のフォークサウンド「Cool of Lullaby」のディスコサウンドなど特徴的なサウンドが印象に残るジャンルレスな曲で構成された今作。聴いてみると音作りへの挑戦や細部へのこだわりに感心させられます。
しかしながら、全体を通してまとまりがあるのはVo.國國(guoguo)の芯のある声にあります！フォークギターから始めその後ポップやシューゲイザーなど幅広く触れてきた経験を持つ彼ですが、聴いてみるとそのルーツがどんな音楽にも溶け合う魅力的な声に表れていることが感じられるでしょう。
ぜひメロウなサウンドを楽しんでみてはいかがでしょうか

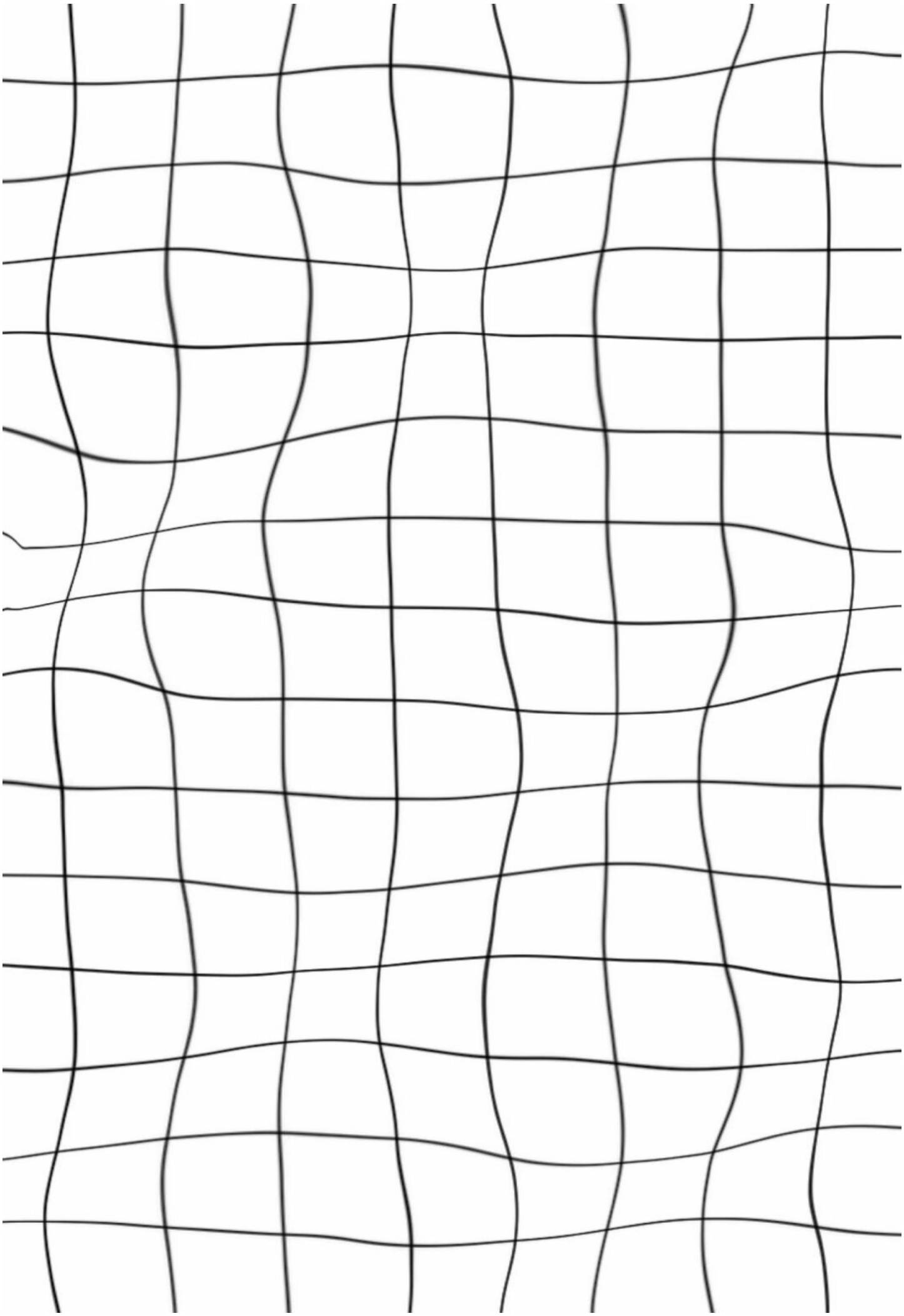
TENDOUJI
『BUBBLE POPS』
4/18 release

SXSWにも出演を果たし、TRIGGER FES 2018にも出演して頂いたTENDOUJIから素敵な新譜が届きました！「BUBBLE POPS」というタイトル通り彼ら持ち前のポップさと楽曲一曲一曲の良さが弾ける最高の1枚です。

『Kids in the dark』の始まりからアメリカ帰りの高揚感が詰まっていて、心地いいサウンドにたちまちハッピーな気分にさせられます。今作は4曲ながらも彼らのイメージでもあるポップさだけでなく、味わいのあるスローな楽曲も入っていて聴きごたえがあります。メロウな1曲、『June song』はテンポもスローで、心を寄り添わせながらしっとり楽しめる、それでいてどこかサーフ感もあり海辺で聴きたくなるような楽曲です

もうご覧になった方も多いと思いますが、『Kids in the dark』のMVが超いいんです…！
見てない人には是非見て欲しい！ 彼らのあの同級生感、溢れ出る仲の良さとなんといっても浅野さんのギターソロが見どころです。顔でギターを弾くというのはこういうことだなと….

TENDOUJI のライブは観客との一体感とパーティー感があり場内がハッピー感で溢れます
愛されるクレイジーさがたまらなく癖になる、技量や理屈の次元を超えた彼らの自由に音楽を楽しむ姿に自然と聴く側も身を任せて楽しんでしまうのでしょう。彼らの耳障りのいいサウンドを聴くだけで聴き手が自然と心踊り、身を委ねてしまう、そんなサウンドを創り出し続ける彼らにこれからも注目です！ 今勢いのある誰からも愛される憎めない四人組バンド、TENDOUJIの自信がたっぷりつまった1枚是非聴いてみてください。ちなみにCDのアートワークからも4人の仲の良さと憎めなさに笑顔にさせられるのでCDを是非手にとって欲しい一作です！



cero
『POLY LIFE MULTI SOUL』

5/16 release

cero待望の3年ぶりのアルバムとなる今作は、もはやカテゴライズ不可能な彼らの音楽世界に気づくと呑み込まれ、彼らのポテンシャルにたまらなくなる素晴らしい作品です。

広大なバックグラウンドを想起させる楽曲でありながら日本人の耳にもしっかり馴染む音楽となっていて、混沌としながらも高次元にまとめあげられた楽曲と違和感のある独特なリズムに心地の良い胸騒ぎを覚えます。気づけば深海の中を泳いでいるような感覚や、未開の森の奥地でどこからか聴こえる音に惹かれるような感覚に陥り、不思議とその世界に導かれていくよう。。浮遊感と不穏さをまとった異次元世界の入り口には独特な高揚感を持った1曲目「Modern steps」。そして静かに導かれた「魚の骨 鳥の羽根」、この曲間の繋ぎがたまりません…！初めて聴いた時は難解な音の融合にカオスと思いましたが、じっくり聴くと綺麗に重なった音たちを一音一音分解していくようで痛快です🤭

彼らの音楽は、深く薄暗い世界の中でひとつ宿る青炎が絶えずゆらゆらと踊っているようで、そこに確かに存在する”生”に強く惹かれてしまいます。彼らにしかできない音楽、「夜になると鮭は」や「レテの子」で良い意味での気持ち悪さに興奮したりしながら、12曲目「POLY LIFE MULTI SOUL」では今までの複雑なリズムから4つ打ちにかえって全てを綺麗に回収するかのように幕を閉じます。このアルバムを聴き終えると、あっという間に時間が流れていたことに気がつくでしょう。そのくらい傑作です。
是非、アルバムの中に広がる異次元世界に足を踏み入れて自由に迷子になってみてください…！

Hinds
『I don’t run』

5/23 release

スペイン・マドリード出身の4ピースバンドHinds(ハインズ)。結成から20回目のライブでThe Libertinesの前座を務め、デビュー ALツアーは各地でソールドアウト。最近では、数多くのロックフェスから引っ張りだこ。そんな勢いの止まらないスーパーガールズたちによる2nd アルバムが日本に到着！ 🎸

今回のアルバムは彼女たちのデビュー当時からファンであったというThe Strokesなどのアルバムを手掛けてきたGordon Raphaelを共同プロデューサーとして迎え、よりホットな一枚となっています！先月23日リリースの日本版の帯には、<Leave Me Alone - ほっといてちょうだい > から<I don't run - あせらずに行くわよ >とハインズらしいマイペースなタイトルが。冒頭7秒が印象的な『The Club』からアルバムはスタートしていきます。

〈 Lately, I've been noticing a change in your walking - 最近、あなたの歩き方が変わったことに気づいたの
(The Clubより)〉

歌い出しのこのドキッとするフレーズ。これまで見逃しがちだった些細な出来事に目を向けてみたくなります。先月MVが公開された『Finally Floating』といったリード曲の他にも、『Rookie』や『Caribbean Moon』のようなお茶目な楽曲も。トレードマークでもあるツインボーカルは、まるで彼女たちが傍で会話をしているようです。ローファイでちょっと気怠そうに歌いながらも軽やかに紡いでいくハインズサウンドは、何度も聴きたくなるはず。
もしお出かけ用のプレイリストを作るならば、欠かせない一枚です！

Phum Viphurit
『Manchild』
3/18 release

2014年デビュー、ニュージーランド育ちで現在は故郷タイ・バンコクを拠点に活動する22歳のシンガーソングライター、Phum Viphurit (プム・ビプリット)。
2018年の3月に日本デビューを果たし、翌月にはWWW主催のアジア・インディ・シーンの交流地点企画“In&Out”にてSTUTS、Alfred Beach Sandalと共演を果たしました。既に日本では〝タイのヤング・スター〟との呼び名も。

彼の最新作『Manchild』は全曲を通してフォークを感じますが、その中に色とりどりのアーバンサウンドが堪能できるシティポップアルバムとなっています。ドリーミー、ディスコからブギーなものまで個性的な曲が目白押しです。また、phumのスイートでソウルフルな歌声がこれらのサウンドに乗ってきらめきを放っています。「Long Gone」はルーパー・エフェクター(音を反復させるエフェクター)を使用して制作された、歌詞同様シンプルでローファイな構成のポップチューン。聴いているとサビのキャッチ—さとテンポ感に口ずさみながらMVの様についついステップを踏みたくなります 👣(笑)…！
来る梅雨にはこの曲を処方しましょう 😊

また、彼が自ら監督を務めたMVは、Phumの音楽性に影響を与えた90年代～2000年代初期の雰囲気漂う映像に。ヒロインがカセットテープを再生するとその年代へとタイムスリップするというストーリーをレトロ＆キュートに演出しています。このMVは公開から約半年でなんと200万回再生を記録し、世界中のリスナーから注目を集めています。

今後の展望として作曲活動やツアーへの意欲を示すPhum Viphurit。
アジアでのシティポップの盛り上がりと共にこれからの活躍に期待したいアーティストです！

Nulbarich
『KISS YOU BACK』
5/16 digital release

ブラックミュージックを基に、また楽曲によって演奏の形式を変えていく幅広いサウンドを得意とする謎めいた5ピースバンド。昨年の3月には、2ndアルバム『H・O・T』をリリース。各地のフェスに出演を果たし、11月には武道館公演を開催。メディア出演はないものの、数々のCMに楽曲が起用され、本シングルも、モデルの森 星が出演しているアネッサのイメージソングとなっています！

イントロのギターの音から、キラキラとした夏への期待で胸が高鳴る本作 ◎ 先月、愛知県で行われたフェス’’森、道、市場2018’’で照りつける太陽の下、初めてこの曲を聴いたときの、心地の良いVo.JQの柔らかな声に自然と身体が動き始めていった感覚は忘れられません。また、サビに近づくにつれて徐々に広がっていく音の展開は、気持ちをさらに盛り上げていきます。バッと視界が開ける感覚で、思わず手を伸ばしてしまうほど。

〈 The sun shines for you now – その太陽は今君のために輝いてる / そのままでいて / I’m into you – 僕は君に夢中だ 〉

サビで歌われるこの歌詞は、キラキラと輝く彼女への気持ちを真っ直ぐに表現したもので、夏の暑さを吹き飛ばすような、爽快感のある楽曲。Nulbarichの、夏を代表する曲になること間違いなしです！ぜひ今年、この曲と共に夏を感じていただけたらと思います 🌊

渦　『ゴーグル１』

5/19 release

都内を中心に活動している男女4人組バンド渦。雪が溶けはじめた春の穏やかさと夏の照りつける太陽と海と…春と夏の景色がいっぱいに広がる『ゴーグル1』をリリース！

春と夏をテーマにした今作は、穏やかに返す波の音が曲にフューチャリングされてあったり、一瞬で散ってしまう花火のようなエモーショナルな曲があったりと、ギターリフをはじめ楽曲それぞれの展開にうつくしい眩しさを感じます。もちろん彼らのポップで爽やかなサウンドは今作でも健在です MVが公開されたリード曲の『告白』では、出会いと別れを繰り返す人のように、引き寄せ合っては離れていく心境を繊細に描かれていると思います。キラキラとしたメロディと甘酸っぱい告白の歌詞には胸がときめきますね…！

〈ここまで来たから許して / 川のほとりギリギリでキスしてよ（告白より）〉

‘’いつだって季節に敏感でありたい’’そんな方に渦の音楽を是非おすすめします。一曲一曲、炭酸のペットボトルを開ける時にシュワッとするあの瞬間にドキドキする、そんな心弾ませる気持ちで全曲楽しむ事ができると思います。
前作『ゴーグル2』もご一緒に彼らの季節に巻き込まれてみてはいかがでしょうか

おとぎ話　『眺め』

6/6 release

去年デビュー10周年を迎えた4人組ロックバンド、おとぎ話から9作目となるアルバムがリリース。
不思議に包まれた彼らの優しく、サイケでポップな楽曲たちに注目です。

最初から胸を掴まれた1曲目「HOME WORK」は同じメロディーの中で**〈頑張っても世界は甘やかしてくれないよ　毎日働いて 毎日働いて〉**という歌詞が後半につれ変化していくのですが、ボーカル有馬さんの唯一無二な歌がその歌詞を引き立てて心に響いてくるのです。日常に疲れた時に聴くと内側からほぐされていくようで、でもしっかり明日も頑張ろうと思える楽曲です。

そんな歌声やおとぎ話の音楽世界は本当に唯一無二で、でも個性的な中でポップさを見事に内包していて、昭和の匂いをかよわした懐かしい歌声も気持ち悪くないギリギリのラインを保って内側にスーッと入ってくる、それがまたたまらないのです。

今回のアルバムはタイトル通り美しい眺めが広がるムードのある作品で、現実と夢の境界線で揺らめきながら音に身を委ねるような感覚でした。ジャケットのあの淡い水色の眺めのように、遠くまで広がる世界に想いを馳せることができる作品だと思います。
切なく甘い世界に心を浸してしまう「綺麗」から、危ない匂いをまとった音から始まり不穏な雰囲気ただようとがった楽曲「HEAD」など楽曲ごと色んな眺めをみせてくれる、その眺めに気づけば夢中になってしまう一枚、彼らの中でも傑作だと思います！全曲いいので全部聴いて心の疲れを是非溶かしてください！

betcover!!
『平和の大使』
6/8 release

現在なんと19歳のヤナセジロウがVo,Gtを務めるプロジェクト、betcover!! 8月1日にリリースされるEP『サンダーボルトチェーンソー』より先行シングル『平和の大使』が配信されております！
まず衝撃を受けたのがこの「平和の大使」という曲名。
どのような語彙センスを以てしたら「平和の大使」というワードがこの世に産み落とされてしまうのだろう…。
そんなことを考えながら、恐る恐る再生ボタンを押しました。
終始メロウな曲調で、全てを包み込むような包容力を持つ、まさに平和を体現したような楽曲です。聴いていると前方からクリーム色の光が差し込んでくるような、ぼんやり甘い夢を見ている気持ちになります。まるで「世の中色々あるけどさ、まあこれ聴きなよ」なんて言われているよう。
サビで深みが増すアンサンブルも堪りません、最高です。

そしてもうひとつ、歌詞が物凄いのです。あまりの素晴らしさに全編ここに載せてしまいたいほどなのですが、少しだけ抜粋させて頂きます。

〈それは南南西から 光を帯びてやってきた けど恥ずかしいくらいにもう 僕はただの人間でした〉

〈僕のノートに溶けたインクが 世界の気持ちを代弁できたら〉

〈人は平和の大使になれるのか 臆病な洗濯物の流れが ゆらゆら 大した事じゃないよ 僕はいつも通りさ〉
この説明不要な美しさ。人の持つ柔らかな気持ち、そしてある種の諦観が見事に表現されており、何度も歌詞を反芻してしまいます。歌詞の全貌が気になる方は今すぐYouTubeリンクをクリック！
この夏はbetcover!!の音楽にフォーリンラブしてみてはいかがでしょうか

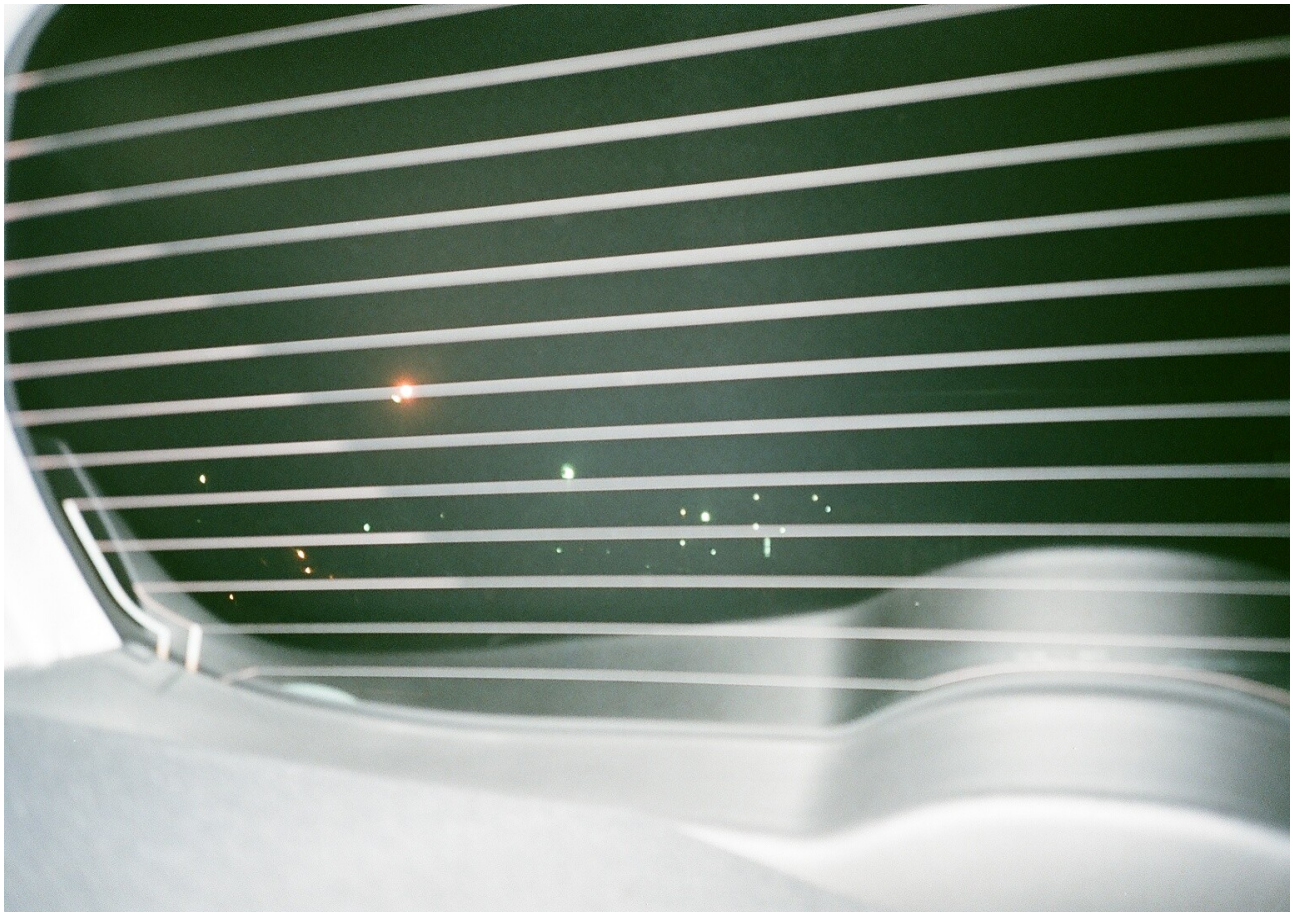
Snail Mail 『LUSH』
6/8 release

ボルチモアで生まれ育った18歳、Lindsey Jordanが率いるSnail Mail(スネイル・メイル)。InterpolやIce ageらが所属するアメリカのインディレーベルMatador RecordsからデビューアルバムLUSH』をリリース！
PitchforkでBest New Trackを獲得した 『『Pristine』をはじめ、彼女のティーンライフがぎゅっと詰まった作品です。店着日はとにかく早く聴きたくて帰り道を急ぎました

目を惹くアメリカカラーのジャケット。『Heart Wave』のMVでも赤と青という対立した色があしらわれています。しかし、中を開けば楽曲から感じる様々な色が加わることにより、より複雑でより彩のある一枚に。USインディー・オルタナがサウンドベースですが、曲によって雰囲気をガラリと変えてしまうギターの音域の幅広さには驚愕です。程よいガーリーさもたまりません。

〈 And I hope the love that you find. Swallows you wholey.
- あなたの見つけた愛が / あなたを丸ごと包み込んでくれますように (Heart Waveより) 〉

10代という美しくも儚い時の中で生きる彼女が等身大で唄う歌詞。痛みや哀しみに寄りそうような優しさを感じる反面、愛の気まぐれさや人を思う事へのさじ加減の難しさを痛感します。
一聴きすれば一瞬にして心を奪われるリンジーの歌声と共に、精一杯生きるさまを描く伸びやかなサウンドには、勇気づけられるという言葉で片付けてしまうのは勿体ないのですが、心を自然と癒してくれる力を持っています。
真っ直ぐな彼女の"今"が落とし込まれている作品『LUSH』、全身全霊で感じてみてください



RHYMING SLANG
『FRESHALWAYSON X RHYMING SLANG / V.A.』7/1release

東京のインディペンデントレーベルRhyming Slangと、韓国のバンド・Akua主宰イベント"Freshalwayson"によるコンピアルバム。韓国インディバンドの来日公演、また日本のインディバンドの韓国公演も開催され、交流が盛んな近年の日韓インディ。今作を機に両国内だけでなくアジアへ、世界へと魅力的な日韓インディの音楽が今後広がっていってほしいと願ってやみません！

Rhyming Slangからは I saw You Yesterday、Cairophenomenons、Yüksen Buyers House 、Ceremonyが、Freshalwaysonからはイベント主宰者のAkuaの他に、DTSQ、Land Of Peace、Bye Bye Badmanといった、両国の新進気鋭のアーティストが参加しています。

Bye Bye Badman-You’re Always Right About Love

韓国国内で多くの賞を受賞し、アメリカの大規模フェスSXSW(South by SouthWest)の出演経験など「最高のルーキー」という肩書きを持つ実力派4人組バンド、Bye Bye Badman。決まった音楽スタイルを持たず、時代毎のスタイルを噛み砕いてオリジナルのサウンドとして発信するアルバムは毎回話題になっています。「You’re Always Right About Love」は甘い歌声とシンセサイザーのリバーブが印象的なドリーミィー・サウンド。浮遊感の音の中で鳴るビンテージで力強いギターの音は、彼らの音楽における変わらない特徴で、新しいサウンドと共存するオールド感が耳馴染みの良さを引き出しています。バンドの音楽的特徴が体現されつつ、今っぽさを感じられるこの曲は、彼らを知らなかった方にもスッと馴染んでいくこと間違いなしです！

Ceremony-Consolation

SUPER SHANGHAI BANDの元ドラマー・Daiki Kishioka(CeremonyではVo./Gt)の、新プロジェクトとして昨年1月に結成されたばかりのニューウェーブ/ポスト・パンク・バンド。彼がデザインした音をYuumi Shidara(Ba)、Rio Shimamoto(Gt)、Hiroyuki Nishida(Dr)の20歳前後の同世代メンバーと様々な解釈を加えながら編集していく…というプロセスで音楽が生み出されています。「Consolation」はアルバム全体を通して聴いていても強く耳に残る一曲 👂 尖ったギターの音とワイルドなヴォーカルが全体を導き退廃的な雰囲気をまとった音楽は、最後の約1分間、雰囲気を変えサイケデリックで夢幻的な世界が広がり終わります。ドラマティックな展開の音楽や、それとは対照的な自然の映像のMVも含めConsolation=慰め というタイトルに対する彼らの哲学が作品の全てから感じられると思います 🤔

聴いている私たち自身もそれぞれに解釈しながら楽しみたいですね！本アルバムはフィジカルとして日韓でカセットリリースされている他、Apple MusicとSpotifyでも聴くことが出来ます。ぜひチェック！

ベランダ
『Anywhere You Like』
4/11 release

2014年4月から京都を拠点に活動している4人組ロックバンド ベランダ。今年の4月に全国流通の2ndアルバムを発売しました。私はこのアルバムの3曲目に収録されている『エニウェア』を聴いた瞬間、一瞬にして心を奪われた訳でして...。なんと言っても、優しさに溢れた高島さんの声と日常の風景が思い浮かびあがるような詞は、聴く度にたまらなく愛おしい気持ちになります。

〈 お金はないが欲張りたい / 用はないけどそばにいたい / 弱いままでも強がりたい / 忘れていくことだけ覚えていたい（エニウェアより）〉

このフレーズを聴いた時、この世の中そう簡単に上手くはいかないけれど、どうせなら自分の思うがままに生きていてもバチは当たらない、そんな風に感じました。MVも公開された5曲目『しあわせバタ～』は絶妙な詞のつくりです。フォーキーで親しみのある音と音の間にある僅かな隙間にぴったりと言葉が当てはまっていく気持ちの良さは是非堪能していただきたい...！冷房のきいた部屋にいるのもいいけれど、ベランダに出て大きく空を見上げたくなります。(ベランダだけに...)彼らの巧みなアンサンブルにのせられ綴られる言葉たちが詰まった『Anywhere You Like』。
何処へ行っても、時が経っても、あなたにとって色褪せる事のない一枚となるでしょう。

Years＆Years
『PALO SANTO』
7/13 release

ロンドンで結成されたエレクトロ・ポップバンドYEARS＆YEARS(イヤーズ＆イヤーズ)。UKチャート1位を獲得した前作から3年。待望の2ndアルバムをリリース！
先日新潟で開催されたFUJI ROCK FESTIVAL'18 ではGREEN STAGEに 登場。画面越しからの観賞でしたが、神聖で異世界な空間へと巻き込んでいくような素晴らしいパフォーマンスでした。そんな彼らはイギリスのOlly(vo,key)、オーストラリアのMikey(Ba),、トルコのEmre(Syn)という多国籍トリオ。
さらに、フロントマンであるOllyはバンド活動の傍ら俳優業も熟すというカリスマ男子…！

エレクトロやダンスミュージックに大きく影響を受けたというバンドサウンドは、『If You're Over Me』や『All For You』のようにキャッチーなハウスっぽさや、『Karma』のようなR＆Bを意識した部分が感じられる楽曲等と様々な要素がブレンドされているように感じます。こうした音楽にも関わらず、演奏形態がバンド構成という事がまた面白いところです。また、彼らの楽曲は明るくて高揚するシンセ・ポップが主でありながら、悲しみが共存していると思います。これは前作からも感じられますが、Olly自身の経験から愛し愛される人の複雑な感情をポップにのせてしまうのです。この大胆な表現にも注目です。
ダンサブルで親しみやすいサウンドでありながら複雑で…全てにおいてのギャップがたまらなくなります。そして今作は、神聖でミステリアスな世界観がイメージとしてあります。歌詞カードの存在も、これから起こる道すべを教えてくれる教典のように感じます。アルバムリリースに際して公開された15分間のショートフィルム等を含め彼らのアートからは、表現の無限性を感じられるほか、このアルバムをしっかり聴き解いていく鍵になっていることは間違いないでしょう。浄化していくように繊細かつ滑らかな歌声と共に広がるエネルギッシュなイヤーズ・ポップ。是非お楽しみください！

ニトロデイ
『レモンドEP』
7/25 release

横浜発4人組ロックバンド、ニトロデイの新作EP。ジリジリした夏をぶっ飛ばすかのような轟音とユース感溢れる一作で、彼らのカッコよさに恐ろしさのようなものすら感じてしまいます。今作は大人の階段を上る彼らの容赦ない進化がありありと記録されていて、彼ら持ち前のパンキッシュなギターロックはきっちり健在しながらも楽曲のアレンジも最高で、2曲目「グミ」ではポップに仕上げられた楽曲の中に、かわいらしくどこか不思議なコーラスワークによって新たな色が添えられていたり。若さゆえのイラつきのようなものが投影されていた前作から、今作は倦怠感を持ちつつもすごく爽快であり痛快で、本当に今年の夏はこの一枚という感じなのです。

個人的にはギターボーカル小室さんの書く歌詞がすごく好きなのですが、〈ぬるいままの炭酸 / 喉の奥流し込んで(レモンドより)〉や、〈無理矢理に目に入る空の青にやられて / 履き古したスニーカー / 空き缶蹴飛ばす気も失せる(向日葵より)〉、〈穴の空いたTシャツ / タベ死んでたカラス(ユースより)〉など、彼らしいぶっきらぼうさと詩的な部分、何か知性を感じる文学的な要素、描写のうまさに魅力を感じます。

歌詞もそうですが彼らは絶対に誰かに媚びるような音楽ではなくて、退屈と夢を同時に持っているようなバンドで、ぶっきらぼうで暗いサイドの音楽の中にぎらついた熱が存在しているように感じます。今の音楽シーンの中で彼らのような音楽は唯一無二でこれからもまた恐ろしく進化していくのだと思うと本当に楽しみでたまりません。。素直にカッコいい音楽をでかい音で鳴らし続ける彼らの音楽を聴いてはワクワクしていきたいです、これからも。そしてジャズマスターを使う女の子がわたしは大好きです。。

羊文学
『若者たちへ』
7/25 release

3人組オルタナティブロックバンド、羊文学から1st Albumのリリース。

最初を飾るのは「エンディング」。まずアルバムの一曲めから「エンディング」で始まるところがまたいいのですが、始まるとスケール感のある楽曲に一気に引き込まれてしまいます。ドラムの一音一音にも息がこもっているような静けさの中で、サビから一気に盛り上がるところは、美しい轟音に儚くも芯のあるボーカルがさらに存在感を持ち、鳥肌立ってしまいます。

そんなシューゲイザーチックな1曲目から一変、「天国」はあっけらかんとしていて、なんともチャーミングな、日常の中の天国を思わせるナンバー。地上から天国に**〈そっちはどう？/ 調子はどう？〉〈クーラーガンガンで布団にくるまってアイス食べる感じ？〉**と問いかけては、**〈それじゃ大差ないね！〉**と一蹴してしまう。なんだかその気持ちよさに心づけられてしまいます。ちょっとレアなDr.のフクダさんのコーラスやアラーム音、様々な声で重ねられる音やVo.塩塚さんのこぶしやキュートな歌、一つ一つが曲の素材となっており、たまらなく愛おしくてアルバムの中でも何回も聴いてしまう一曲です。

「絵日記」は、割とシンプルな曲で聞きやすいと思います。
ちりばめられた歌詞には、私たち若者が生きる日常の儚さや刹那、その後悔のようなものが夏と重ねられていて、シンプルで美しいメロディーにのせられた歌詞が心の上をスッとなぞってトゲをとってくれるかのようです。甘くて冷たくて一瞬で私を幸せにしてくれるアイスクリームも簡単に溶けてなくなってしまう。毎日毎日その日にあった出来事を思いながら、気がついた頃には夏休みもおわってしまう。宿題も終わらないまま、会いたい人ややりたいこと、夏の間にやりきれないことなんて考えなくてもたくさんあったと思ってしまう。たくさん時間を与えられる夏だからこそきっと色んなことに一喜一憂して、限られた時間の中でたくさん葛藤を繰り返して眩しい一夏を終えると、また少し大人に近づくのだなあと、そんなことを考えてしまいました。

このアルバムを通して聴いていると、曲ごと見える夏の情景が様々だなと感じたのですが、特に「夏のよう」で浮かぶ情景が、夕暮れになってもジリジリと暑い夏の夕暮れのようで、日が落ちてなんでか少し寂しくなるような心に染みる曲だなと、近所の小学校の校舎に日が沈んで、空が赤くなっていくのを眺めながら思いました。

「ドラマ」

この曲が本当に大好きなこともあって、アルバムが出るのをずっと楽しみにしていました。羊文学が出演してくれた「TRIGGER FES 2018」で、渋谷WWWのあの綺麗な照明を浴びた彼女たちの生のステージを観ながらこの曲を聴いた時、色んな思いが溢れてきて、**〈青春時代が終われば / 私たち、生きてる意味がないわ〉**という歌詞をあの場で聴いた瞬間、ああ本当にその通りだ、と思って不思議に心打たれてしまったんです。

羊文学のライブに対する純粋な感動と企画に対する思いが相まって溢れたその時の感動を今でもよく覚えているのですが、冷静になって考えれば別に青春時代が終わっても生きてる意味はあると思います。でもそういうことじゃなくて、確かに私たちが生きている若き青春時代が終わったら、その頃できていたことも気づけばできなくなって、学校の帰り道に制服を着た私たちはくだらないことで頭がいっぱいで、たわいない会話で大笑いして、夕暮れの空の色に感動して、そういうことってきっと青春時代にしかできない。
いくらでも希望があった時代が終われば、自分で考えて選んで人生を作っていかなきゃなくなる、そんな今だからこそ持つ夢は今やるしかなくて。青春時代がどこからどこまでかなんてきっと自由で、大人になっても青春は存在すると思います。でも私たちが若者として生きている一瞬一瞬は本当にどこを切り取ってもかけがえのない、簡単に壊れてしまうものだから、日々はとてもドラマチックでその時は気づかなくても本当はすごく大切な一面の積み重ねなんだとそんなことを思いました。

「コーリング」

イントロを聴いた瞬間から何か心が掻き立てられる感触があって、曲を通してもなんだか自分の中で隠れた熱い気持ちが湧き上がってきては前向きな気持ちになれる曲で、なんでも出来る気がして、笑いながら明日のことを考えてワクワクして、何かやらなきゃいけない気がして自分の未来に足早に駆けたくなる一曲です。なぜかこの曲が一番好きなのは、すごくまっすぐに自分のリアルな部分に刺さるからだと思います。厚みのあるベースと、巧みなドラムさばきで一層曲の展開も迫力を増し、歌詞の主張もより厚みを増した、胸に届くものになっているように感じます。
そしてこの曲の歌詞に背中を押される人は私以外にもきっといるはずです！

最後をさわやかに彩るのは、心も晴れ晴れとした気持ちにさせてくれる「天気予報」。
優しいアルペジオから始まりまさにハッピーエンドを思わせる、羊文学の中でたぶん最もポップな曲です。なんだか希望の風に優しく頬を撫でられているようで楽園の中にいるかのような感覚になります。途中のギターの轟音もたまらないですが！

8/20には代官山UNITでワンマンが決まっている羊文学。
私ももちろん行きますが、このアルバムの曲が聴けるかと思うと本当に純粋に楽しみです。彼女たちの音源を聴いたら是非ライブに足を運んでみてください、そこでしかみれないものがあります。一瞬で虜になって、釘付けになってライブをみていた私のように、羊文学の音楽がたしかに自分の生活を支えて救ってくれる、そんな体験がどこかの誰かにありますように。

The Vaccines
『Combat Sports』
3/30 release

イギリス・ロンドン出身の5人組 The Vaccines（ザ・ヴァクシーンズ）が、今年3月に前作から約2年半ぶりとなるアルバム『Combat Sports』をリリース！シンプル、キャッチー、メロディックの三拍子が揃った直球サウンドで''ギターロック復活宣言！''とリリース前から盛り上がりも凄かったですよね。The Vaccinesはメロディが本当に最高でカッコ良くて、、なので本作は彼らの魅力をフルで爆発させたアルバムだと思います。物足りないとかギターメインの方が良かったとかマイナスな意見も少々ありますが、飛び交う電子音と自由で力強いギター、その2つの音の良さと距離感に拘り続けたものが形に残された傑作だと思います。

アルバムのスタート「Put It On A T-Shirt」はまるで雲の上にいるような甘美なメロが印象的でジャスティンの歌声が気持ちよく響きます。そんな幸せ溢れるサウンドに浸っていると2曲目の「I Can't Quit」でギターロックのパンチをくらう。この流れが地味に好きです(笑)疾走感のある楽曲ですが、リスナーに楽曲を味わせてくれる堅実な演奏で、また好きになってしまう。。。Youtubeでパフォーマンス動画が公開された「Nightclub」はトリプルギターという無敵っぷり。動画を見ながらどうなっているんだろうと耳が迷子になりながら聴きました。個人的には「Out On The Street」が1番好きで特にサビのギターと電子音がジャスティンの歌声に応答しあうような掛け合い、是非聴いて頂きたい！
全11曲、熱狂と陶酔の32分間。鬱々とした気持ちを吹き飛ばしてくれる一枚です。

ArtTheaterGuild
『Farafra』
2017/8/23 Release

今年10月に全国流通盤ミニアルバムのリリースを控えた、都内で活動中のオルタナティブロックバンドArtTheaterGuildの色褪せない旧譜をご紹介します！私自身CDを手にしてからずっと支えられてきた作品で、リリースから1年経った今、あれから1年たったのかと振り返って感慨深くなってしまうくらい大好きな作品です。

ArtTheaterGuildで世に出てる作品はもう一つ1st EP「4AM Mellow Divers」という、ピロウズの山中さわおさんがリミックスを手がけた作品で、わたしはその中の楽曲を聴いて一瞬にして彼らの音楽に虜になりました。温度感が低いようで、心にスゥーっと染み渡って安心を行き届けてくれる歌声に、聴いてすぐ、あ～好きだ～と思って嬉しくなったのを覚えています。ただ今回紹介する2nd EP「Farafra」は本当に何というかオルタナの真髄を見たような、そしてわたしの中でいつまで経っても色褪せず、一周回ってここに帰って来たくなるような場所です。全国流通盤リリース前に改めてこの作品の良さを書きたいなと。

ArtTheaterGuildの曲の中でも「Farafra」という曲がわたしは1番好きで、こんな曲を作れる人って最高だ…と聴く度に思いながら、本当にたくさんの人に気づいて欲しいと思います。。音楽のセンスや知識だけでなくてその人の経験や考え方、見たもの感じたこと色んなものが落とし込まれた楽曲の中で、 どこか甘酸っぱく懐かしい、時間の流れを止めて落ち着けるような彼らの世界がやっぱり好きだと思いました。ArtTheaterGuildの大きな魅力はVo&Gt.伊藤さんの声と詞世界、抜群のメロディーラインだと思うのですが「Farafra」は本当にその良さが十分に敷き詰められている一曲で、聴いているとすごく自分を肯定されているような気がして、体の内側から日常の中で凝り固まったしこりのようなものが解きほぐされていく感覚です。 4曲を締めくくる「UNDERTALE」は、Farafraリリースから1年記念にサウンドクラウドに最近アップされたので、是非この機会に聴いてみてほしいです！
決してお互いがお互いを邪魔せず、曲自体をみんなで大事にしているのが伝わるようなアレンジで、サビのメロディーの良さの延長線をなぞるようなギターソロだったり、調和したサウンドがただただ心地良くて、またその楽曲のクオリティーの高さの中でどこかまだ青くてオルタナ特有の荒削りな感じも胸にきます。今の時期の少し涼しい風が吹き抜ける中でゆっくりと聴きたい作品です！是非聴いてみてください！

Climb The Mind
『チャンネル3』
2017/2/22 release

Climb The Mindは1999年に結成された、名古屋発のスリーピースバンドです。2017年にリリースされたアルバム『チャンネル3』は今なおわたしの心を掴んで離しません。というのも、『チャンネル3』はクライムにとって約7年振り(！)のアルバムであり、丁度彼らの活動が緩やかになったときに好きになってしまったわたしにとって、初めてリアルタイムで追えるアルバムだったからです。好きなバンドの新譜をフラゲ日に買いに早足すること、レコ発に行けることの喜びを身に染みて感じました…。

それはさておき本作、まさにクライムの魅力が凝縮された1枚となっています。クライムと言えば、3人が紡ぎ出す熱の篭ったエモーショナルな演奏、そして何と言っても小説の短編集を読んでいるかのように構築された、けれども私たちの生活に溶け込む世界観の歌詞でしょう。

まず前置きとして言っておきたいのですが、『チャンネル3』の歌詞カードに載っている歌詞には、実際には歌われない言葉たちが本当にたくさんあります。歌詞カードに掲載されている詞が、歌われる歌詞を補っているのです。なので、ただ曲を聴くのと、歌詞カードを眺めながら聴くのでは印象が全く異なります。やはり歌詞カードを読むと、歌詞の世界の奥行きがぐっと広がりその世界がより色鮮やかになる感じがします。こういうことだったのか！と新たな発見もあったり。また、句読点を用いた縦書きの歌詞も、載っている写真も素晴らしいので、是非本作は歌詞カードを眺めながら聴いて欲しいです。
今回の記事では歌詞カードに掲載されている歌詞を引用させて頂きます。

　2曲目の「ポケットは90年代でいっぱい」を聴くたびに、心を揺さぶられてどうしようもなくなり、泣き出したい気持ちでいっぱいになります。音源ではアンプのノイズとドラムカウントから曲が始まるのですが、この始まり方からしてもう泣けるというか、頭の中が最高の2文字で埋め尽くされます。最高。

〈叶わない大きな想いがあるってことをやっぱり持っていて、まぶたを開けたら、もう本当にいないのか。脆い涙はゆっくりと、この頬を伝う。〉

という歌い出しで、ある種の挫折感を丁寧に描写し、

〈かなしいことばかり僕らはポケットの中で強く握りしめて、溢れる想いは遠くを眺めていた。いつか叶う、いつか叶いますようにと。〉

と、「かなしいこと」をポケットの中に握りしめて、まさにぎゅっと祈るような気持ちに終結させる歌詞が本当に素晴らしくて、何かに打ちひしがれそうになるときにはこの一節が読みたいが為にしょっちゅう歌詞カードを開いていました。背中を押すわけではなく、一緒にそっとそばにいてくれるようなこの歌詞を見ると、もう戻れない日々や過ぎてしまった時間の残酷さと同時に、
これから先にやって来る未来の可能性に気付かされます。

〈かくゆう私は〆鯖でした。〉という衝撃的な歌詞から始まる「デスマッチ」は、〆鯖の最期を描くことにより、消費されゆくものの悲しみを突き付ける楽曲となっています。サビに差し掛かるあたりにはすっかり自分が〆鯖と同一化しているので、〆鯖が単に人間に食べられる話とは思えず非常に胸に迫るものがあるのです。それは、歌詞の作りはもちろん、山内さんの一言ずつ大切に噛みしめるような歌い方と、心の叫びのような響きによるものだと思います。Wowを**〈魚ー。〉**と表記する洒落っ気や、1曲目の「プールの時間」は金魚がモチーフとなっており、最後は〆鯖でアルバムを締め括り気を利かせることを忘れないのが流石です…。

〈大丈夫、心配しないで。知ってるよ、その心のきれいなことを。(「心のすべて」より)〉

〈好きな食べ物はオムライス、タコス、ショートケーキ。お腹を空かせて、今日はそれを思い浮かべて帰ろう。(「タッチ」より)〉

　すべてを包み込んでくれる神様のような視点や、夕暮れを眺めながら坂道を下って家に向かうような、ノスタルジーさえも感じさせるクライムの歌詞は、日々生活していく中でずっと大切にしたい感性でいっぱいの宝物みたいなものであると思います。季節や時期など関係なく、一生を通して聴ける1枚ですので、是非手に取ってみて欲しいです！

Shame
『Songs of Praise』
1/12　release

サウス・ロンドンの若き５人組ポスト・パンクバンドShame(シェイム)。今年１月にリリースした『Songs of Praise』はデビュー作とは思えない程の完成度。まるで語りかけられているような詞に重なるVo.チャーリーの歌声、共に作り上げられるそのサウンドスケープに誰もが夢中になるはず。掛け合いの詞と音の展開がクセになるConcrete、じわじわと焦らしていくThe Lick、ダークな作風が多い中爽快な曲調が印象に残るOne Rizla。彼らのバンドサウンドは、ポストロックの特色を荒削りながらも存分にいかし、歌詞では彼ら自身の心の叫びを大胆かつ真っすぐに描いていると思います。これだけ楽曲に熱を感じることができるのに驚きましたが、最後まで油断は禁物です...！

アルバムの幕を閉じるAngieは、これまでの流れを変えてしまうセンセーショナルソング。終盤の闇を切り裂くようなギター音によって転調するあの時の高揚感、本当に何にも代えがたい瞬間です。初めて聴いたときは震えが止まりませんでした。自殺した恋人への愛を綴ったという歌詞にも心が揺さぶられます。失ってしまった悲しみ、目の前で揺れているスカート、もう少しだけ側にいたい。取り残された男側の独特な表現に注目です。

〈 And bathe in the absurd, Deep fry your feelings so they can't escape, Disappear into nothing, And find your happy place ― 馬鹿げたことに身を浸し 感情を唐揚げにするんだ、逃れられないように 消えて無になり 幸せになれる場所を見つけるんだ 〉

常に最良の選択なんて出来ないけれど、人を思うという事がどれだけ尊いことなのか改めて痛感させられます。少しの雑味も殺さずに最後まで生かすShameのサウンドと真っすぐと心に入っていく言葉。不安を強みに変えることを教えてくれる、支えとなってくれる一枚です。

Bird Bear Hare and Fish
『Moon Boots』
9/5　release

元Galileo Galileiのメンバー3人に当時のサポートメンバー1人を加えた4人組ロックバンドBBHFが初のフルアルバムをリリース。彼らの進む道を示しつつも、邦楽の中で依然と存在感を持ち、その指針ともなるバンドの有り様を体現した1枚です。

Galileo Galileiが元々わたしは中高生の頃から好きで、彼らにしか表現できない煌めきのようなものが大好きで、川の水面にチラチラ反射する日の光のように繊細で、でもしっかりと心の深いところまで掴んで希望を生み出してくれる、そんな存在がわたしの日常を幾度も救ってくれていました。自分の青い部分をめちゃめちゃ揺さぶられていましたし、彼らの音楽を聴くだけで青春だと思えていました。そんな彼らが解散して、ただただ悲しくて、というか邦楽シーンに彼らがいなくなったらもう本当につまらないと思って悔しくてたまらなかったですね。。

BBHFは新しくてガリレオ時代の音楽とは全く違った良さがあります。スケール感が大きくなったというか、音楽のバックグラウンドがかなり広がった印象で、大きく開けていくような音像なのです。リズムマシンやシンセが楽曲の中でも効果的に使われていて、新しさと共に自由さを持った音楽で本当にやりたい音楽をやっているんだと思うと、これからもずっと自分たちのペースで音楽を続けていってほしいしずっと楽しみにしていたいですね。

12曲入りのファーストアルバムから名曲ばかりが詰まっていて、それはもう全部最高なのですが、個人的には「Different」が一番好きです。アルバムの最後の曲がまた良いのですが、リリックビデオにも注目です 👀 ガリレオが好きだった人も初めての人にも響く、彼らの新しい音楽性が凝縮された最高な1枚です。是非聴いてみてください～！

入口
ENT
メリーゴーランド

シャムキャッツ
『Virgin Graffiti』
11/21 release

バンドとして新たなフェーズに入った前作『Friends Again』から約1年半、早くもシャムキャッツから新譜が届きました。シャムキャッツ5thアルバム『Virgin Graffiti』です。とにかくシンプルにシャムキャッツの良さが出ている前作がわたしは本当に大好きで、何回も繰り返し聴いたしライブにもちょくちょく足を運びその良さを噛み締めていたので、この『Friends Again』を経たシャムキャッツが辿り着く先でどんな景色を見せてくれるのだろう、と個人的にも新譜をとても楽しみにしていました。

1曲目は「逃亡前夜」。徐々に様々な楽器が重なってアンサンブルを作っていくイントロを聴いたとき、何故かとても感動してしまって。雲ひとつない文句なしの冬空のもと、てくてく歩きながら聴いていたのですが、あーこれが幸せっていうことなんだなとすんなり腑に落ちました。なんだか嬉しくて思わずビートに合わせて足を進めてしまって人知れず恥ずかしくなってしまうほど、、「逃亡前夜」って単語だけ聞くと大ごとのような気がしますが、シャムキャッツの「逃亡前夜」は全くそんなことがなく肩の力が抜けていて、もし良かったら一緒に来なよ、なんか嫌になったら逃げちゃいな、みたいな良い意味での身軽さがあります。本当に自然体な"今"のシャムキャッツが表れていて、グッと来てしまうのです。

〈今はただ昨日とは違う道を 探していくのさ(「完熟宣言」より)〉

〈僕の目を見ていて 時が枯れるまで(「おしえない！」より)〉
このように様々な"今"を切り取る中、どうしても流れて失われてしまう"今"という瞬間のはかなさとそれ故の愛おしさを歌う名曲「このままがいいね」をアルバムの最後に持ってくるあたりが本当に最高だと思います。『Friends Again』から『Virgin Graffiti』に、過去から今にかけて、全てが確実に繋がっているのだなとひしと思える2つの作品です。1日1日を大切に抱き締めて生きていきたいなあと、この2つの素敵なアルバムを聴いていると思います。
是非シャムキャッツの"今"を覗いてみてください

ニトロデイ
『マシン・ザ・ヤング』
12/5 release

横浜発4人組ロックバンド、ニトロデイから1st Albumのリリース。前作「レモンド」EPから5か月という短いスパンでのリリースとなりますが、バンドって本当に生き物なんだと実感してしまうほど、レモンドで顔を出した芽がグングンと成長しているようで、ニトロデイの良さがましましに表現されていると思います。また違ったアレンジで再録された曲も一味違って良いのですが、新曲もバンドのいい状態や勢いを感じられる楽曲だと思います。

アルバム全体を通して聴くと、意思を持った歌詞だったり、決してぶれないニトロデイの少年が持つような野望みたいなものだったり、彼らの静かな闘志がよく伝わるように感じました。特に今回歌詞はしっかりとストーリーを待ったというか、前作までの言葉を吐いては羅列するような感じからまた、ギボ小室さんの独特の語感が更に生かされているようですごく良いのです。
ちゃんとバンドのビジョンというかニトロデイだからできる音楽を確立していっていて、それが一曲一曲のアレンジに現れているんじゃないかと思います。

「ジェット」が中でも個人的に好きです。本当にイントロから清々しい爽快感で溢れたまらないのですが、**〈ジェットの自転車に乗って 空を泳いでみたい〉 〈立ち漕ぎでゆく 風は優しい 空腹だけが残る 〉**など言葉の言い回しがやはりニトロデイらしさを残しながら清々しく気持ち良いのです。MVも楽曲の疾走感や若さ故の焦燥感がヒリヒリと伝わる映像で素晴らしいので是非

羊文学
『1999』
12/5 digital release

3人組オルタナティブロックバンド、羊文学から配信限定でリリースされたクリスマスシングル。もうクリスマスプレゼントももらえない年齢になったわたしにとっては、嬉しいクリスマスプレゼントとなりました🎄
羊文学のクリスマスソング…！と嬉々としながら再生ボタンを押すと、もうイントロから、あ、これはダメだ…と。本当に名曲です。

Vo/Gt塩塚さんの透き通った歌声が12月の冷たく透明な空気にすーっと溶けていくようで、サビのドラムのタンバリンや、リバーブがかり柔らかな響きを帯びたギターの音は心ときめくクリスマスを感じさせます。イントロからそうですが、遠くのほうからシャンシャンとサンタさんがやってくる感じがしますよね。。
楽曲に散りばめられた印象的なコーラスも、とにかく美しくて、光が溢れた街中一帯を不思議な魔法で包み込むかのようです。また一つ大好きなクリスマスソングが増えて、嬉しいばかりです。
わたしもこの曲のカセットテープほしかったです、、

TRIGGER MAGAZINE
TRIGGER DISC REVIEW vol.1-9 (2018)

〈 Writers 〉

M.Sekino
M.Sato
I.Gibo
R.Hirai
E.Kobayashi

〈Source of Album Artwork〉

All Artists Official HP & Official Twitter

〈 All Information 〉

TRIGGER FES実行委員会

✉ Mail info@triggerfes.jp

Twitter & Instagram @TRIGGERFES

TRIGGER MAGAZINE official saite
https://triggerfes.wixsite.com/triggermagazine

編集後記

TRIGGER DISC REVIEW を手に取って下さり、ありがとうございます。
はじめて知ったという方もいつも読んでるよという方にも
TRIGGER MAGAZINE、DISC REVIEW について少しだけ。

TRIGGER MAGAZINE は一昨年11月に開設した Webメディアです。
先々代の代表がイベント開催以外の場所でもアーティストをプッシュしていきたい、
そんな思いで立ち上げたサイトを受け継いでおります。

昨年4月より更新をはじめたDISC REVIEWは、TRIGGER スタッフのとっておきの１枚を
月１回ご紹介しています。これからの更新もぜひお楽しみに。
レビューに対するコメントもお待ちしております…！

最後になりましたが、この冊子が毎日にちょっとした煌めきを与えてくれる、
そんな一枚に出会うきっかけになれば幸いです。

これからもTRIGGER FESともにTRIGGER MAGAZINEをどうぞよろしく。

2019.2.10

TRIGGER MAGAZINE
TRIGGER DISC REVIEW vol1-9 (2018)
Feb 16, 2019